

## II. 米国のパフォーマンス・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

活動を支えるしくみの成熟度が伺える。

ボランティアへの参加希望のあった人には、劇場やホール側の側から連絡が取られる。その際、「シンフォニー・スペース」と「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」ではボランティア・コーディネーターによって、希望職種や可能な活動時間帯・頻度などが確認される。

また、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」や「ケネディ・センター」では、アンケート用紙や申込用紙を送付し、必要事項を記入して返送してもらうしくみになっている。「ケネディ・センター」では、メンバーシップ代割引券や返信用封筒など、ボランティア希望者への送付書類が専用封筒に入れられ、希望者にはすぐに手渡したり郵送したりできるようにキット化されている。

### ● オリエンテーションと教育・研修

「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」では年に数回、「ケネディ・センター」では年に2回のオリエンテーションが行われる。前者ではアットホームな雰囲気とするため、お茶やお菓子が用意され、センターの施設概要や歴史、活動の目的などが広く紹介される。個々のボランティア業務の詳しいオリエンテーションは各部門の古参ボランティアに任されている。

「ケネディ・センター」のオリエンテーションでは、センターの成り立ちや運営体制、ボランティアの自治構造、服装やモラル、勤務態度などの細則が記載された20ページ近いボランティア・ハンドブックと、言葉使いや電話応対などの基本的な接客方法の記載された接客マニュアルが手渡される。

業務の内容が確定すると、それぞれの業務に対応したマニュアルが配られ、具体的な業務の内容は、先輩の指導によって訓練されることになっている。「ケネディ・センター」の場合、ボランティア開始後の3ヶ月は「仮採用」の扱いで、この間の「出勤率」、「誠意」、「知識の吸収度」をボランティア・マネージャーが評価し、基準に達している場合にのみ、正式採用されるというしくみになっている。正式採用された後も、定期的に評価の見直しが行われ、業績が基準に達しない場合は、一時的な“停職処分”が言いわたされるという厳しさだ。

「オープンハウス・フェスティバル」の場合は、開催の1週間前に公開オリエンテーションが開かれ、フェスティバル当日は、開始前に業務ごとの説明会が開かれて、実際の業務の内容、対応方法等が確認される。

### (3) ボランティアの横顔と参加の動機等

米国の事例については、ボランティア参加者へのインタビュー、アンケート等は実施しなかったが、調査の過程で得られた情報を参考に、簡単に整理してみた。

#### ① ボランティアのプロフィールと参加の動機

まず「シンフォニー・スペース」の場合、映画が無料で見られるといったボランティア参加の“役得”よりも、「This is ours!」、すなわち「この劇場は私たちのものなん

だ」という強い意識が、何よりもボランティア参加の一番の動機とのことであった。ボランティア・コーディネーターは、周辺地域での生活が長く、この文化施設の常連であることから、リタイア後はこの文化施設でボランティアをしたいと考えていたという。

参加者の傾向としては、カウンター業務は比較的若年層が、また平日の昼間の時間帯に活動するDM 発送のボランティアは高齢者が中心。

一方、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」で働くボランティアの平均年齢は50～60歳代が中心で、近年高齢化が進みつつあるという。女性の割合が高く、美術や舞台芸術など、何らかの芸術に興味を持っている人が多い。

リタイアした人にとっては、「家から出て人と会う」という社交の機会をボランティア参加の動機にしている人が多い。地元の自慢の文化施設で働くことを誇りに思い、ボランティアの仕事をとおして知的好奇心、知的刺激が与えられ、またそのことを通じて新しい経験や友人を得られるといったことも動機になっているようである。

また、「ケネディ・センター」でも、ボランティアは50～60歳代の人が7割を占め、中でも60歳前後のリタイアした人が多い。首都圏近郊や通勤圏内の住宅地に住む人で、舞台芸術に興味のある人、すなわち比較的豊かな中産階級以上の白人層が中心。開館後25年間ボランティアを続けている人もいる。フェスティバルの力仕事には、こうした人々では対応できないので、特別に米軍の機関にボランティア要員を提供してもらうとのこと。

参加の動機は、友人がボランティアをしているから、あるいは舞台芸術が好き、劇場の内部事情に触れられるといったことなどで、このあたりは、わが国のボランティア参加者の意識と共通する部分も多い。

## ② ボランティア参加の特典と館側とのコミュニケーション

ボランティア参加者への特典としては、それぞれ次のようなものが用意されている。

- ・シンフォニー・スペース：映画上映時のカウンター・ボランティアは無料で映画鑑賞が可能、勤務時間が10時間になった DM 発送ボランティアにはチケットが2～5割引になるメンバーの資格を付与
- ・スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター：半額チケットを2枚進呈
- ・ケネディ・センター：駐車場利用が無料、交通費実費支給、ニュースレター「フレンズ・スクリプト」の毎月送付、メンバーシップ加入料10ドル割引、無料コンサート・チケットの進呈（不規則）、ギフトショップ割引など

こうした特典とは別に、施設がボランティアに対して感謝の気持ちを表す機会が豊富に用意されているのも、米国のボランティア活動の特徴だろう。

例えば、「シンフォニー・スペース」では、時々小さなティー・パーティーを開いて、ボランティアを招待したり、パフォーマーと直に接する機会を設けることがあるが、これは、ボランティア参加者に感謝の意を伝えるために開催されている。

## II. 米国のパフォーマンス・アーツ分野におけるボランティア活動の実態

また、「スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター」では、年に何回か「サンキュー・ランチ」、「サンキュー・ディナー」、「サンキュー・ティー・パーティー」などのほか、ボランティアの家族も参加できる「ホリデイ・パーティー」を開催している。さらに、大きなイベントが終了した時点では、ボランティア・コーディネーターから「サンキュー・レター」が送られる。

「ケネディ・センター」でも、ボランティアと館側のスタッフが交流するために「ティー・パーティー」が開催されるが、毎年12月にはボランティアの感謝パーティーとして「ボランティア・リコグニション・ガラ」が開催される。そこでは、優秀な業績を残したボランティアに、その業績に応じて様々な表彰が行われるしくみになっており、その細かな規定はいかにも米国らしい\*<sup>3</sup>。「オープンハウス・フェスティバル」のボランティアには、ユニフォーム代わりに T シャツが無料配布されるほか、イベント終了後の“打ち上げパーティー”も開催される。

具体的な目に見える形での報酬よりも、ボランティアにとっては、自分の活動が施設の運営に役に立っているという実感が重要で、こうした館側からの感謝の意を表明することは、ボランティアの円滑な運営にとって重要なことだと考えられる。実際、「ボランティアにとっては、“Thank you!”と言ってもらうことが何よりの報酬」という声も聞かれた。

### (4) 問題点・課題

ボランティア運営に関する問題点や課題としては、各劇場から次のような事項が指摘された。

#### ● シンフォニー・スペース

- ・事務作業のアシスタントとして長期的なボランティア・スタッフが欲しいが、ある程度責任ある仕事を任せるとなると、今のように誰でもいいという訳にはいかない
- ・定期的にオフィスに通うということになると、自分の自由裁量の中で行動できる範囲を超えてしまうので、ボランティアの域を出てしまうことになる

#### ● スナッグ・ハーバー・カルチュラル・センター

- ・全米の傾向として、ボランティア人口が減少しており、ボランティアの平均年齢が年々高齢化している
- ・常に新しいボランティアを採用して140名を確保しないと、センターの運営が困難に直面する

#### ● ケネディ・センター

- ・ボランティアというものが「古い」風習と考えられつつあり、いかに若い層を取り込

\*<sup>3</sup> ①ボランティア・オブ・ザ・イヤー：長期に尽くした優れたボランティアを表彰、②プレジデント賞：ボランティア歴5年以内の人には表彰状、5年・10年・20年の人にはそれぞれ色違いのピンと表彰カップを進呈、③フレンズ・オブ・ライフ賞：15年以上勤務した人には名誉賞として表彰状、リコグニション・ガラへの生涯招待、フレンズ・スクリプトの生涯送付、ギフトショップの15%生涯割引(10ドル以上)が、それぞれ与えられる。